



えいじゆう のぞみ
本部保健師 永住 希

みなさんは、病院を受診する時や薬局で薬を処方してもらう時にお薬手帳を提示していますか？
薬の効き方は、その時の体調で違うため、同じ薬を処方されても十分に効果が得られる時とそうでない時があります。

使用している薬で、症状が改善しないと感じたり、別の症状が出てしまう場合には、薬の量を調整したり別の薬に変えてもらう必要があるかもしれません。そんな時に活躍するのが「お薬手帳」です。

お薬手帳は、**どんな病院でどんな薬を処方してもらっているのかが一目で分かる**ため、薬の使用状況が正確に把握でき、自分に合った安全な医療を受けることにつながります。

お薬手帳があれば
こんなことに気づいて
もらえます！

ケース
1

同じ効果の薬が別の病院でも処方されていた

腰痛で整形外科を受診したAさん。
「痛み止め」の薬と、痛み止めによる胃への負担を軽くするための「胃薬」が処方されました。

調剤薬局でAさんのお薬手帳を見た薬剤師が、数日前に胃腸炎のために内科を受診し**同様の胃薬が処方されている**ことに気づき、Aさんに確認した上で整形外科に連絡。今回は「痛み止め」の薬のみの処方となりました。



ケース
2

処方された薬を正しく使用していなかった

アレルギー症状のため、耳鼻科から飲み薬を処方されていたBさん。症状が改善しないため、再診し同じ薬を処方してもらいました。

調剤薬局で、薬剤師がBさんのお薬手帳をみながら、薬の使用状況を確認すると、本来は**1日3回飲まなければならない薬を1日2回しか飲んでいなかった**ことが発覚。Bさんに「決められた量と回数で飲まない」と薬の効果を十分に得られないことを説明し1日3回飲むよう伝えました。

決められた回数で薬を飲むようになったBさんは症状が改善され、次の再診で薬の量を減らすことができました。

えっ？
1日3回飲む薬
だったの！！



ケース 3

入院先で役立った

仕事中に足を骨折し、病院に入院することになったCさん。医師から現在飲んでいる薬を聞かれ、糖尿病の治療で処方されている薬の情報が書かれている「お薬手帳」を提示しました。

骨折の治療で使用する薬には、糖尿病の薬と一緒に使用すると効果が弱くなる薬があるため、お薬手帳の提示によりスムーズな治療が行えました。



「お薬手帳」の正しい使い方



● 病院や薬局では必ず提示する

お薬手帳を忘れた場合にはその旨を伝えましょう。自宅に帰ったら、「お薬手帳」にその日受診した病院や薬の情報を記録しておくことが大切です。薬の情報が書かれた紙(シール)をもらった時には忘れずにお薬手帳に貼りましょう。また、日頃から診察券などと一緒に保管しておくことで持ち忘れを防ぐことができます。

● お薬手帳は1冊にまとめる

病院ごとにお薬手帳を分けてしまうと、他の病院で処方されている薬との「飲み合わせ」や「重複処方」の確認が難しいため、お薬手帳は1人1冊で管理しましょう。

薬は、効果や副作用、使用時の注意事項などが1つ1つ違います。病院や薬局で「お薬手帳」を提示し、医師や薬剤師が目にすることで、相性の悪い薬の処方や同じ効果の重複処方、体調や体質に合っていない薬の処方などで必要以上の薬を使用し体に負担がかかること(ポリファーマシーによる健康障害)を防ぐことができます。



1冊の「お薬手帳」を上手に活用し、自分に合った薬で体調管理を行いましょう！